

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第12号(3月)について

このことについて、病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

予報第12号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生時期 (予想)	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病	-	並	並	並
	アブラムシ類	-	やや少	やや少	並
	ハダニ類	-	並	並	やや少
ナス	すすかび病	-	並	並	多
キュウリ	べと病	-	少	少	やや少
野菜共通	ミナミキイロアザミウマ	-	やや多	やや多	やや多
	コナジラミ類	-	並	並	並
茶	カンザワハダニ	並	やや少	並	並

この時期の病虫害で防除上特に注意すべき事項

- 1 微小害虫の冬季防除の徹底
九州北部では3月上旬以降の気温が平年より高いと予報されている。ハダニ類、コナジラミ類、アザミウマ類等の害虫は気温上昇に伴い増殖が加速し被害が拡大するので、密度の低いうちに防除を徹底する。
- 2 イチゴ親株の炭そ病防除の開始
イチゴの炭そ病防除は親株からの防除が重要である。薬剤散布は3月から始め、定期的な防除を実施する。また、耐性菌の発生を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をロ-テ-ション散布する。

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果（±）

発病株率 1.2%（平年 1.1%、前年 0.8%）

発生ほ場率 11.5%（平年17.6%、前年 15.4%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並（±）。

(3) 防除上の注意

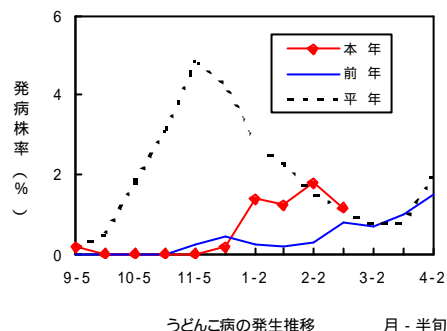
ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面の病斑の有無を随時確認し早期発見に努める。

イ 発病葉、果実は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 施設内が多湿になると、発病に好適となるため、予防散布を徹底する。

エ 不要な下葉を除去し、薬液が葉裏にもかかるようにする。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 イチゴのアブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果（±）

寄生株率 0.3%（平年 1.9%、前年 0.5%）

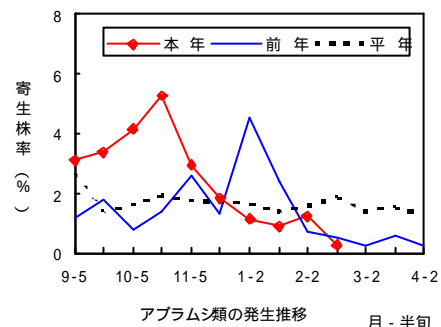
発生ほ場率11.5%（平年16.3%、前年19.2%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並（±）。

(3) 防除上の注意

ア 多発生後は防除が困難となるので、発生状況に十分注意し初期防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

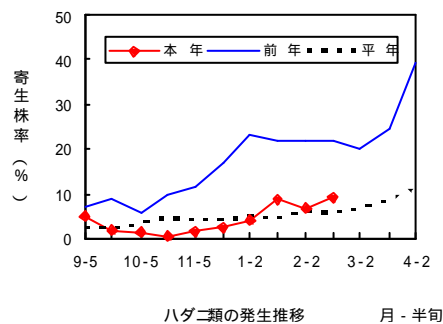
(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果（±）

寄生株率 9.4%（平年 5.9%、前年21.9%）

発生ほ場率46.2%（平年38.6%、前年65.4%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並（±）。



(3) 防除上の注意

- ア ハダニ類は、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多い。多発生後は防除が困難となるので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生がみられたら早めに防除を行う。
- イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。その際、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。
- ウ イチゴ以外の植物にも寄生するので、ほ場内や周辺の除草を徹底する。
- エ ハダニ類が寄生した摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。
- オ チリカブリダニ等の天敵を利用しているほ場で、ハダニ類が増加した場合は、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤で補充防除する。
- カ 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定は注意する。

4 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果(±)

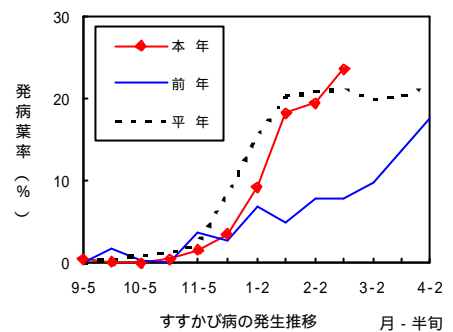
発病株率 23.6% (平年21.3%、前年 7.8%)

発生ほ場率 77.8% (平年92.9%、前年77.8%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



5 キュウリべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果(-)

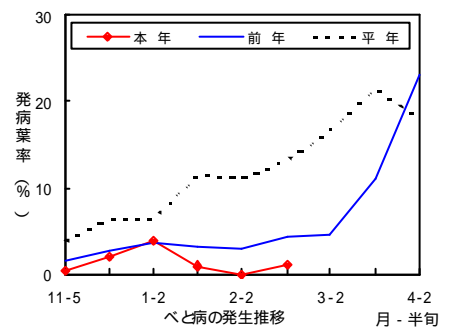
発病株率 1.1% (平年13.1%、前年 4.2%)

発生ほ場率 40.0% (平年56.2%、前年66.7%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。
- イ 草勢が低下すると発病が助長されるので、適正な肥培管理を行う。
- ウ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 ミナミキイロアザミウマ (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果 (+)

ナス寄生葉率 5.7% (平年 3.0%、前年 9.2%)

発生ほ場率 66.7% (平年 29.4%、前年 77.8%)

ナス被害果率 0.6% (平年 0.3%、前年 1.0%)

発生ほ場率 12.5% (平年 13.5%、前年 37.5%)

キュウリ寄生葉率 3.4% (平年 2.0%、前年 0%)

発生ほ場率 60.0% (平年 20.7%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並(±)。

(3) 防除上の注意

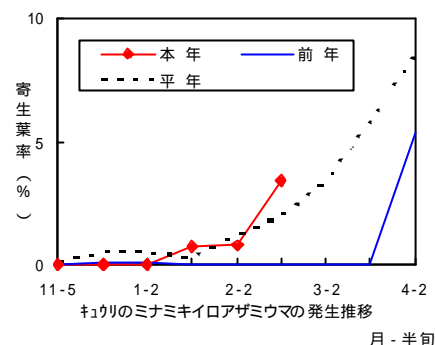
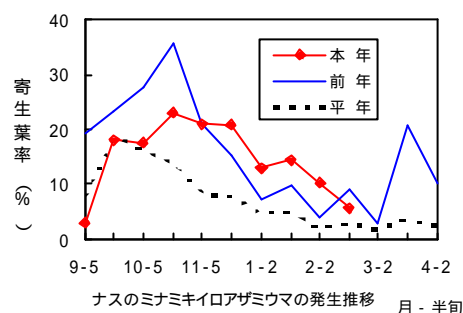
ア 発生後は防除が困難である。早期発見に努め、早期防除を徹底する。

イ 初発生は、葉脈沿いに現れる食害症状を確認して判断する。葉表では長さ2～3mmの細い白斑が葉脈に沿って連続して生じる。また、葉裏では3～5mmの大きさの銀白色に光る部分が葉脈沿いのところどころに生じる。

ウ 葉表より葉裏への寄生が多いので、薬剤散布は散布むらがないように丁寧に散布する。また、薬剤の到達しない葉内の卵から幼虫が、土中の蛹から成虫が徐々に発生してくるので、それらの虫を対象に5～10日後にもう一度薬剤散布を行う。

エ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

オ 本種はキュウリの黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスは本虫が低密度でも伝染し、蔓延する恐れがあるので防除を徹底する。



7 コナジラミ類 (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査結果(±)

ナス寄生葉率 7.2% (前年 4.3%)

発生ほ場率 55.6% (前年 44.4%)

トマト寄生葉率 0.3% (平年 3.5%、前年 0.2%)

発生ほ場率 16.7% (平年 29.7%、前年 16.7%)

キュウリ寄生葉率 0.6% (前年 0.5%)

発生ほ場率 20.0% (前年 33.3%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温、降水量共に平年並(±)。

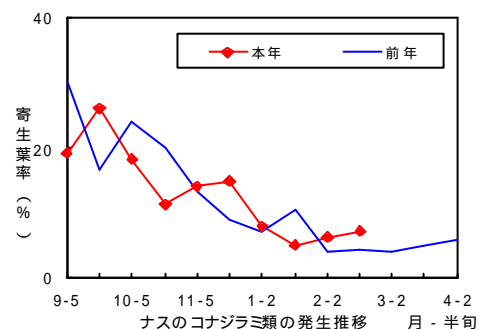
(3) 防除上の注意

ア 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げる。

イ 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように散布する。

ウ タバココナジラミはトマト黄化葉巻病(TYLCV)の媒介虫であるので、防除を徹底する。

エ ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ 灰色かび病	並	並	並	施設果菜類の灰色かび病は、比較的低温で多湿の場合に発病しやすい。日最低気温が高いと温度設定によっては暖房機が稼働しないこともあるので、強制送風をするなどして湿度の低下を図る。
ナス うどんこ病 灰色かび病	やや少 並	やや少 並	やや少 並	
トマト 灰色かび病 葉かび病	並 やや少	並 やや少	並 やや少	
キュウリ うどんこ病 灰色かび病	並 少	並 やや少	並 やや少	

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生時期：平年並

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5 半月調査結果 (-)

< 表層葉 >

寄生葉率 1.0% (平年 1.4%、前年 2.8%)

50葉当たり虫数0.7頭 (平年 1.5頭、前年 2.5頭)

発生ほ場率 23.1% (前年 46.2%)

< 裾葉 >

寄生葉率 4.5% (平年 3.3%、前年 4.2%)

50葉当たり虫数7.3頭 (平年 5.3頭、前年 4.0頭)

発生ほ場率 50.0% (前年 53.8%)

平坦地の一部ほ場で越冬成虫の発生が多い。

イ 越冬後第1世代孵化幼虫の発生ほ場率は、11.5% (平年 11.3%、前年 15.3%) で、発生時期は平年並 (±)。

ウ 表層葉でも産卵が認められ、今後裾葉から表層への移動が増加することが予測される (±)。

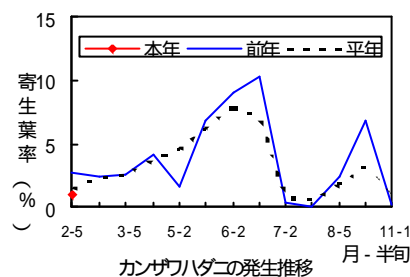
エ 向こう1か月の気象予報は、気温・降水量ともに平年並 (±)。

(3) 防除上の注意

ア 茶園をよく観察し、越冬成虫が多いほ場では、基本防除の前に成虫に効果の高い薬剤で早めに補助防除する。

イ 基本防除は、平坦地で3月5～10日頃、山間地で3月10～15日頃を目安に徹底する。

ウ 薬剤は、寄生の多い葉裏・裾葉に十分かかるよう丁寧に散布する。



< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。
天気は数日の周期で変わるでしょう。予報期間の前半は気温の変動が大きいです。
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間は平年並でしょう。
週別の気温は、1週目は低く、2週目は高く、3～4週目は平年並または高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 20年2月22日発表抜粋)

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が農作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう対策を講ずるとともに注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数のなどラベルを確認し使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnp.ne.jp

